

#S6 シオン篇 2 -T.C.4763-

今夜も私は、夢を見る―――
でも、その夢が好きなわけじゃない。
空が嫌い――厭な色。空気も嫌い――厭なニオイ。
人も嫌い――
みんな、厭な目で私を視る―――
みんな―――父さんも―――
それでも幼い私は、ここで暮らしている。
夢の世界で暮らしている。
なぜいつも同じ夢を見るのだろう――
視たくないのに―――忘れたいのに―――
ぼんやりとした夢の世界――
不安と、哀しさと、いたたまれなさ――
そんな曖昧な世界の中で、
空の色と匂いと人の目だけがギラついている。
夢だと解っているのに―――現実ではないのに―――
だから―――だから私は、楽しい事を考える。
素敵な思い出を。
あの人と過ごした日々を。日溜りと温もりを。
いつまでもこうしていたい、永久に―――
たとえ生まれ変わったとしても、永劫に―――
何度でも―――何度でも―――

#S6 シオン篇 2 -T.C.4763-

シオン：——うわぁ、ここが曙光。
——自由軌道型コロニーといっても、内部は惑星上と変わらないのね。
あ————！ 信号が変わっちゃう！

？？？：危ないっ！

シオン：きゃあっ！

？？？：大丈夫——かい？

シオン：は、はい、あの——
ありがとうございます。

？？？：曙光は初めてかい？ 急いでるようだけど、どこへ行くの？

シオン：あ、ええと——第三開発局の人事課へ。

？？？：それなら、ここを渡る必要はないよ。ほら、向こうからチューブトレインに乗れば、直通だ。

シオン：ええ！？ あ、ほんとだ——
ありがとうございます！ すみません、あわててたもので気づかなくて——

？？？：かまわないさ、それより急いでるなら、もう行った方がいいんじゃないかな。

シオン：はい、そうします。それじゃ、あの——失礼します！

シオン：（ああ、もう——入社早々に恥ずかしい——
でも、眼鏡[ホログラス]なくてよく見えなかったけど——
いまの人の制服、どこかの開発局のかな
なんだかすごく優しくて、懐かしいような気がする声だった————）

兄さんの反対を押し切って入社した、ヴェクター・インダストリー。
いろいろ不安はあったけど、私の胸は、
新生活への希望であふれていた。
でも、すべてが思い通りにいったわけじゃ、ない。
私の配属は、志望が通り、
第三開発局へ内定していると聞かされていた。
でもなぜか、
実際に発表された配属先は、第一開発局の設計課だった。
曙光に持ち込んだ荷物をあわてて梱包し直した私は、
一局設計課の研究施設が開設されている、
惑星カリオカで暮らすことになった——

よ、よろしく願いたします。

シオン： あ、その声——！

———久しぶり、やっと思い出してくれたかな？

ケビン： いやいや、おかげで優秀な新人を交通事故で失わずにすんだんだから、お安いご用さ。

ケビン： ああ、すまない――――

ハンス： はいはい、どいたどいた。———よろしく、ウヅキさん。ハンスだ。

バンスと名前は似てるけど、赤の他人ね。で、こいつはチャウ。

チャウ: よろしく～。しかしまあ、一瞬学生かと思ったよ。おいくつ?

シオン： え、あ、18歳です。――先月で。

チャウ: 18かあ〜。いやあ、いいもんだねえ、若い子は。

ジェシー： どうせ、私は若くないですよ。せっかく、お昼買ってきてあげたのに、もうあげない。

チャウ：ま、待って！ こんな、ありきたりの挨拶だって、

——ていうか、ちょっと！ それ俺の金で買ったやつじゃないか

ジェシー： いー、だ。

ハイ、シオン。私はジェシー、よろしくね。

シオン：はい、よろしくお願いします。

ジェシー：野獣の巣へようこそ。

ケビン： おいおいジェシー、いくらなんでも野獣の巣はないんじゃないか？

ジェシー： あら、主任は当然”別”ですよ。こいつらのことです、こいつらの。

シオン：（ふふ――――）

なんだか、楽しそうな職場。ここなら、うまくやっていけるかもしれない――)

シオン：——本当にすみませんでした。

矯正用の眼鏡[ホログラス]を、前もって曙光に送った荷物の中に入れてしまって――

あの後も、家に戻るまで、何度も轢かれそうになったんですよ。

ケビン：———そうか、そんな理由があったんだ。

僕はまたてっきり、道路に飛び出して自殺でもするんじゃないかと。

邪魔して悪かったのかな———と思ってたよ。

シオン：やだ———そんなふうに見えます？

ケビン：いや、そんなことはないんだけどね。それにしても、子供の頃からって言ってたよね？

その———世界が違った形に見えてしまうのって、いつものことなのかい？

シオン：いえ、そんなに頻繁に起こることではなくて、ごくたまに。

ここ最近は、なんともなかったのについ———

ケビン：しかし、地形や移動体の情報を眼鏡[ホログラス]に視覚化するだけじゃあ、

根本的な解決にはなってないなあ。

いつ本当に、車に轢かれてしまうかわからないぞ。

シオン：———仕方、ないんですよ。病院に行って診察を受けても、原因不明って言われちゃいますから。

とりあえず、眼鏡[ホログラス]を着けていれば、日常生活に不便はないですし。

ケビン：君さえ良ければ———

シオン：え？

ケビン：君さえ良ければだけど、今度、僕の研究室で診察させてくれないか？

君のその症状、もしかしたら僕の研究テーマに関係あることかもしれないんだ。

治すことは難しいと思うけれど、少なくとも、今より快適な生活を送らせてあげられるかもしれない。

シオン：（主任の研究テーマ———？）

ケビン：迷惑———だったかな？

シオン：あ、いえ、そんなことないです！ あの———お願いします。

-

ジェシー：どう？ もう慣れた？

シオン：はい、覚えることが多くて、ちょっとパニック気味ですけど、なんとか。

ジェシー：ふふふ。最初はみんなそう———

シオン：でも、自信ないです。ソフトウェアの設計なんて、やったことないから。

ジェシー：入社早々、三局からの転属だものね。あっちでは何を？

シオン：レアリエンの情操関係のコーディネイトを———

と言っても、研修期間中だけで、本業務に入る前に転属になっちゃいましたけれど。

ジェシー：あっ、それでかぁ！

シオン：はい？

ジェシー：少し前に主任がね、三局から提出された論文が凄いて、やたらと褒めてたのよ。

レアリエンの情操コーディネートに関する論文。

これは絶対に一型の開発に役立つって、柄にもなく、興奮していたわ。

そっかーーーーシオン、スカウトだったわけだ。

シオン：そんなーーーー

ケビン：誰が柄にもなく、なのかな？

ジェシー：主任ーーーー！？

ケビン：ジェシー、これから一型コアに昨日のバージョンを書き込んでみたいんだけど、いいかな？

ジェシー：今すぐですか？ 私、この後、13時から本社との U.M.N. ミーティングなんですーーーー

ケビン：ああ、そうだったな。うーんーーーーそれはたしかに外せないなあーーーー

そうだ、ウヅキくんー君、ジェシーの代わりに手伝ってもらえるかな？

シオン：えっーあ、はい、わかりました。

ケビン：じゃあ、後で第三試験室に来てくれ。

シオン：は、はいーーーー

シオン：これが、最新型の一型コアー

ケビン：そうさーーーー

シオン：表面になにか書いてありますねーコ・ス・モ・スーコスモスーーーー？

ケビン：” Kosmon Obey Strategical Multiple Operation systems”——秩序に従属する戦略的多目的制御体系。

グノーシス現象に対抗するために建造される兵器群の主幹 OS なんだ。

シオン：兵器群ー

ケビン：抵抗がある？

シオン：い、いえーただ兵器と聞いて、ちょっと動揺してしまってーすみません。

ケビン：謝ることはないさ。兵器として創られてはいるけれど、これは人を殺すための道具じゃない。

KOS-MOS はあくまで、グノーシスを取り除くためだけに存在するシステムなんだ。

シオン：グノーシスーーーだけなんですか？

ケビン： そうさーそれに OS と言っても、KOS-MOS は単なるプログラムの羅列じゃないんだ。
人型の外装も持つことになるんだよ。すでに二局で建造が始められている。

シオン： これが、KOS-MOS——
主任、私ーはやく KOS-MOS が目覚める姿を見たいです。

ケビン： ああ、君たちの協力があれば、その日は遠くない。きっとねー——

-

シオン： ————

ケビン： 最近、熱心だね。

シオン： —あ、主任。

ケビン： 深夜残業も多いと聞してる。ほどほどにしないと、身体を壊すぞ。

———はい、これ。

シオン： えー—なんですか？

ケビン： 連日、身を粉にして働いてくれてる、愛すべき部下へのささやかなプレゼントさ。

シオン： え？ そんな、私、プレゼントだなんてー

ケビン： 開けてみて。

シオン： ———はい。

あ、これってー眼鏡[ホログラス]ですね。

ケビン： つけてみて。

シオン： はいー

ケビン： 見た目は、市販品と変わらないだろう？

シオン： ええ、でもなんだか、つけた感じが——

ケビン： 君の視覚のことだけど、僕の研究テーマに関係あるかもしれないって言ったよね。

——虚数領域のことは知ってるかい？

シオン： ええ、以前ー論文を読んだことがあります。

たしか、通常は知覚できない、現実とは反対側の世界だとか。

ケビン： そうだね、わかりやすく言ってしまうと、そういう解釈になる。

要するに、世界の構成が虚数で記述された領域ー

我々の意識は、そちらに属するものではないかとも言われている。

シオン：その虚数領域が、主任の研究テーマなんですか？

ケビン：そうだ、そして君の症状、恐らくは虚数側の領域が見えてしまっているんだと考えている。

シオン：！ そんなことが――

ケビン：僕らには普通、見えるはずのない世界だ。君が混乱するのも、無理はない。

これまでの眼鏡[ホログラス]でも、周辺情報を視覚に投影して、一応の矯正はできるかもしれない。
けれど、それでは根本的な解決にはなっていないはずだ。

シオン：ええ――

ケビン：その新しい眼鏡[ホログラス]はね、形こそ普通の眼鏡だけど、レンズとしての機能はないんだ。

シオン：眼鏡じゃないんですか？

ケビン：うん。強いて言うなら、U.M.N.の端末のようなものかな。

U.M.N.は単なるネットワークシステムじゃない。

そこには僕らの世界の存在する、すべての情報が包含されている。

この街も、星も、君の身体や僕の身体、いやーその心の情報までも。

その眼鏡[ホログラス]にはね、そういったU.M.N.に流れる情報を直接、君の視覚野に届ける働きがあるんだ。

実数領域側――つまり僕らが”普段見ている側”の世界像をね。

シオン：すごい――主任、これを私のために――

ケビン：まあ、その、以前から興味を持っているテーマだったからね。

シオン：ありがとうございます。私、なんてお礼を言ったらいいか――

それにしても、驚きました。こんな小さな物にそんな凄い機能があるなんて――

ケビン：世界の本質から見れば、見かけの姿なんてものは、それほど重要ではないんだよ。

小さいと感じているのは、あくまで僕らの主観さ。

その本質――U.M.N.に流れる情報そのものが重要なんだ。それは、KOS-MOSにも言える。

シオン：KOS-MOSにも――？

ケビン：システムは形骸。

KOS-MOSの本質はね、U.M.N.に流れている”彼女の情報”そのものなんだ。

今はまだそれを形にできないけれど、いつの日にか僕はそれを――

――

シオン：（主任――あなたはいつも、そうやって遠くを見る――

あなたの瞳には、なにが映っているのですか――？）

ケビン：――それにしても、君は働き過ぎだ。

シオン：すみません、昨日のテストの結果が気になっていたから――

ケビン：ま、上司としてはありがたいことだよ。でも、君の身体にとってはあまり好ましくない。

目の下、クマができてるよ。

シオン：や、やだ――ほんとですか！？

ケビン：今はまだ若いからいいけれど、過労は後々、君の肌に重大かつ深刻なダメージを与える。

どうせナノマシンで治るさ――なんて思ったら大間違い。知ってるかい？

ナノ虫のATPスピンドルモーターが出す不活性物質が残留して、肌の遺伝データを改竄するって話。

シオン：そんなこと、あるんですか――？

ケビン：要するに、美味しい食事ときちんとした休息や睡眠に勝る健康法は、いまだないってこと。

シオン：そうですね、ちゃんと休んで美味しいもの、食べないと――

ケビン：知ってる？ このカリオカの軌道上にリゾート専門のコロニーがオープンしたって話。

シオン：あ、はい！ U.M.N.で見ました。素敵なところですよ。

ケビン：どう？ 週末にでも行ってみないか？

この先休みを取るのも難しくなりそうだし、気分転換と休養も兼ねて――

シオン：！ 行くって――ふ、二人きりでですか？

ケビン：それとも、野獣たちも誘って行くかい？

シオン：い、いえ！ 行きます――

――二人で。

ケビン：OK。じゃ、後で予約を入れておくよ。

シオン：予約って――今からで間に合うんですか？

ケビン：うん？ キャンセル分ぐらいはあるんじゃないか？

シオン：そんな無計画な――主任って、綿密な計画と予測に基づいて行動する人だと思っていたのに――

ケビン：そう見えるのかい？ 僕は元来、無計画な男だぞ。

人生万事、塞翁が馬。全ては流れのままに――ってね。

シオン：ふふふ――

ケビン：あ、笑ったな。

シオン：ご、ごめんなさい――でも、なんだかおかしくて――

ふふ、ふふふ――

その週末、私と主任は設計部のみんなには内緒で、
軌道上に上がった―――
―――二人きりで。

シオン：コロニーから見える星空って、ほんとに瞬かいですね。

ケビン：まあ、正確に言えばそれは、星空ではなく、強化ガラス越しの宇宙だからね。

シオン：もう―――主任ってば、そんなこと言わなくてもいいじゃないですか！

ケビン：ごめんごめん。でも、こんなところで”主任”はないんじゃないか？

シオン：あ、そうですね。

じゃあ、その―――

ケビン―――

ケビン――先輩。

ケビン：まあ、そんなところかな。

シオン：でも、ほんとに綺麗――

この満点の星空のどこかで、今も惑星が消えていっているなんて、信じられない。

ケビン：遥か昔、人は止むに止まれぬ事象に追われ、宇宙へと進出した。

以来四千年の間、隣人と呼べる生命体との出逢いは叶わなかった。

誰もが人は孤独な存在であると諦めかけていたその時、グノーシスは現れた。

人という存在を消し去るために――

シオン：祖父が、よく言っていました。

森羅万象には必ず意味や理由がある。だから、この宇宙に存在することを許されるんだ――って。

もその通りだとしたら―――

私たちは滅びることを運命づけられている存在なのかもしれませんよね――

まるで宇宙が、私たちを拒絶しているかのよう――

ケビン：だが、僕たちはその運命を自らの手で変えようとしている。

宇宙を拒絶しているのは、むしろ僕らの方なのかもしれない。

シオン：それでも先輩は KOS-MOS を――？

ケビン：僕の生まれた星はグノーシスによって、滅ぼされてしまった。母も、妹も――

シオン：―――！

ケビン：僕だけが生きている―――そして、KOS-MOSの開発に打ち込んでいる。

何もできなかったことへの贖罪なのか、それともすべてを奪った者への復讐なのか――

正直、わからなくなる時がある。

シオン：しゅに――いえ、ケビン先輩―――

ケビン：でも、これだけは言える。たとえ宇宙が望んでいなくても、彼女は僕らの希望なんだって―――

シオン：わかります。なんとなく―――私も、ミルチアで両親を亡くしましたから――

ケビン：ウヅキくん―――

シオン：なぜ自分がここにいるのか―――自分のすべきことはなんなのか―――どこへ行こうとしているのか―――

すべての答えが、まるで濃霧に隠された彼岸のよう――

でも、いまは―――先輩の望みを叶えてあげたい。

あまり力にはなれないかも知れないけれど、そこに希望が待っているのなら――

ケビン：僕の歩もうとしている道は、間違っているのかも知れない。

それでも―――一緒に歩いてくれるかい？―――シオン。

シオン：はい、喜んで。ケビン先輩―――

楽しい思い出は、

私のなかで、いつも黄金の輝きを放っている。

決して褪せることのない、

まばゆく、あたたかい、輝きを―――

けれど、思い出の最後はいつも、真っ赤に彩られている。

私の大切な人たちの、

―――血の色で。

そして今夜も私は、夢を見る―――